
横山奈美

1986年岐阜県生まれ、愛知県瀬戸市在住。

捨てられる寸前の物を描く「最初の物体」シリーズや、ネオンをモチーフに、背後の配線やフレームまで克明に描く「ネオン」シリーズなど、物や言葉を持つ価値観を問いつつ、個々の存在に同等の眼差しを注ぐ。最近の主な個展に「遠くの誰かを思い出す」(ケンジタキギャラリー、2024年)、「アベルト10 横山奈美 LOVEと私のメモリーズ」(金沢21世紀美術館、2019年)、グループ展に「Before/After」(広島市現代美術館、2023年)、「六本木クロッシング 2022展：往来オーライ!」(森美術館、2022年)などがある。



photo: Gunji Takumi

大巻伸嗣

「存在」とは何かをテーマに制作活動を展開する。環境や他者といった外界と、記憶や意識などの内界、その境界である身体の関係性を探り、三者の間で揺れ動く、曖昧で捉えどころのない「存在」に迫るための身体的時空間の創出を試みる。近年の主な展覧会に、「Interface of Being 真空のゆらぎ」(国立新美術館、2023)、「地平線のゆくえ」(弘前レンガ倉庫美術館、2023)、「The Depth of Light」(A4美術館/成都、2023)、「存在のざわめき」(関渡美術館/台北、2020)など。「Rain」(愛知県芸術劇場、2023)、横浜ダンスコレクション2019「Futuristic Space」(横浜赤レンガ倉庫)などパフォーマンス作品も展開。東京ガーデンプレイス紀尾井町、Ijlst (オランダ)、Morpheus hotel at City of Dreams (マカオ)などパブリックアートも多く手がけている。



Pic by paul barbera / where they create

ジュディ・ワトソン

1959年、クイーンズランド州マンドゥベラ生まれのワトソンは、クイーンズランド州北西部のワニ族の末裔にあたります。先祖由来の経験、および個人的経験は、絵画、版画、ビデオ、彫刻、インスタレーションなどさまざまなメディアにわたる彼女の芸術的実践において、大きな影響となっています。

ワトソンはしばしば、植民地主義の複雑な歴史と、その先住民コミュニティへの影響を取り上げます。彼女は移住、生存、回復のテーマを探求し、これらの問題に対する認識と理解をもたらそうとします。そうした作品はストーリーテリングの力強い手段であり、文化保護の一形態とも言えます。

1980年代から精力的に作品を発表してきたワトソンは、1997年のヴェネツィア・ビエンナーレ・オーストラリア館の共同代表作家のひとりとして参加し、2006年には第23回全国アボリジニ・トレス海峡諸島民芸術賞で、「Works on Paper」賞を受賞。また同じく2006年には、ビクトリア国立美術館の「クレメンジャー現代美術賞」を受賞しています。2011年、ワトソンの個展『waterline』がワシントンD.C.にあるオーストラリア大使館で開催され、2012年にはシドニー・ビエンナーレに出展。2018年には、ニュー・サウス・ウェールズ州立美術館で『the edge of memory』と題された大規模個展が開催されました。ワトソンはこれまでにオーストラリア全土でパブリック・アート・プロジェクトのコミッション作品も制作しており、2007年にキャンベラのリコンシリエーション・プレイスへ設置された《fire and water》、2016年にシドニーのジョージ・ストリート200番地に設置された《ngarunga nangama: calm water dream》、そして同年ブリスベンのクイーンズランド州立美術館 | 近代美術館の10周年記念として設置された《tow row》などがあります。そして2024年には、ワトソンの活動の重要な大規模個展となる『mudunama kundana wandaraba jarribirri』がクイーンズランド州立美術館 | 近代美術館で開催されました。彼女の作品はオーストラリアのすべての州立美術館、オーストラリア国立美術館、東京工科大学、台北市立美術館、大英博物館、シドニー現代美術館とテートの共同収集プログラム等、オーストラリア国内外の重要なコレクションに収蔵されています。ワトソンはグリフィス大学の非常勤教授であり、2018年にはクイーンズランド大学から美術史の名誉博士号を授与されています。



Judy Watson, 2022.

Photo by Rhett Hammerton.
Image courtesy of the artist and Milani Gallery, Meanjin / Brisbane.

エル・アナツイ

エル・アナツイはガーナ出身の彫刻家であり、その業績豊かなキャリアの大半をナイジェリアでの生活と制作に費やしてきました。アナツイは現在、ナイジェリアのンスカとエヌグ、ガーナの 테마にスタジオを構え、世界でも最も優れた、人々の琴線に触れる作品を輩出しています。彼はアフリカ史上最も高く評価されているアーティストの一人であり、世界でも有数の現代アーティストと言えます。アナツイは、酒瓶のキャップ、キャッサバ芋のすりつぶし機、新聞の印刷版など一般的には廃棄されてしまう資源を用い、カテゴリーにとらわれない彫刻を制作します。これら素材の使用は、再利用や変容への関心、そして場所という制約を超越すると同時に自身の大陸と繋がりたいという本質的な欲求を反映しています。彼の作品は植民地主義の歴史を問い、消費、廃棄物、環境のつながりを描く一方で、その中核にあるのは彼の実践を際立たせる独自の造形言語です。アナツイは、地元のアアルコール・リサイクル・ステーションから調達したアルミのボトルキャップを何千個も折りたたんでくしゃくしゃにし、銅線で束ねた大規模な彫刻で知られます。巨大なスケールになることもあるこれらの複雑な作品は、光り輝き、重厚感を持ち、丹念に作られながらもしなやかです。彼はインスタレーションを開いたものにし、設置するたびに作品が新しい形をとることを促します。

主な受賞歴に「世界で最も影響力がある100人」タイム誌（アメリカ、2023年）、スコウヒガン彫刻メダル、スコウヒガン・スクール・オブ・ペインティング・アンド・スカルプチャー（アメリカ、メイン州、2020年）、高松宮殿下記念世界文化賞 彫刻部門、日本美術協会（東京、2017年）、ロレンツォ・イル・マニーフィコ生涯功労賞、第11回フィレンツェ・ビエンナーレ（イタリア、フィレンツェ、2017年）、ブランディワイン・ワークショップ・アンド・アーカイブス生涯功労賞、ブランディワイン・ワークショップ（アメリカ、ペンシルベニア州フィラデルフィア、2017年）、リーズ・ビジョナリー賞、AMREFヘルス・アメリカ・アートボール（アメリカ、ニューヨーク州ニューヨーク、2017年）、名誉芸術博士、第365回入学式、ハーバード大学（アメリカ、マサチューセッツ州ケンブリッジ、2016年）、名誉美術博士（DFA）、2016年卒業式、ケープタウン大学（UCT）（南アフリカ共和国、2016年）、栄誉金獅子賞、第56回ヴェネツィア・ビエンナーレ（イタリア、ヴェネツィア、2015年）、名誉会員、アメリカ芸術科学アカデミー（アメリカ、マサチューセッツ州ケンブリッジ、2014年）、名誉会員、ロイヤル・アカデミー・オブ・アーツ（イギリス、ロンドン、2014年）、「ニューヨークで開催された個展部門 第二位」（ブルックリン美術館開催『Gravity and Grace: Works by El Anatsui』に対して）、国際美術評論家連盟米国支部（アメリカ、2014年）、第245回夏期展覧会 チャールズ・ウォラストン賞、ロイヤル・アカデミー・オブ・アーツ（イギリス、ロンドン、2013年）、30周年記念賞、スミソニアン国立アフリカ美術館（アメリカ、ワシントンD.C.、2009年）、プリンス・クラウド賞、プリンス・クラウド文化開発基金（ナイジェリア、ラゴス、2009年）、ビジョナリーズ賞、ミュージアム・オブ・アーツ・アンド・デザイン（アメリカ、ニューヨーク州ニューヨーク、2008年）、大阪トリエンナーレ：第9回国際現代造形コンクール銅賞（大阪、1998年）、関西テレビ放送賞、大阪トリエンナーレ：第3回国際現代造形コンクール（大阪、1995年）、入選、第44回ヴェネツィア・ビエンナーレ（イタリア、ヴェネツィア、1990年）

マルグリット・ユモ－

マルグリット・ユモ－（1986年フランス、ショレ生まれ）は、ロンドンを拠点に活動を行っています。2011年、ロンドンのロイヤル・カレッジ・オブ・アートで修士号を取得。これまでに、ラファイエット・アンティシパシオン（フランス、パリ、2021年）、クストフェライン・ハンブルク（ドイツ、ハンブルク、2019年）、ムゼイオン近現代美術館（イタリア、ボルツァーノ、2019年）、ニュー・ミュージアム・オブ・コンテンポラリー・アート（アメリカ、ニューヨーク、2018年）、テート・ブリテン（イギリス、ロンドン、2017年）、ハウス・コンストルクティヴ美術館（スイス、チューリッヒ、2017年）、シンケル・パヴィリオン（ドイツ、ベルリン、2017年）、ノッティンガム・コンテンポラリー（イギリス、ノッティンガム、2016年）、パレ・ド・トーキョー（フランス、パリ、2016年）で個展を開催。ユモ－の作品は、クストハレ（スイス、バーゼル、2021年）、イスタンブール・ビエンナーレ（2019年）、ボンビドゥー・センター（フランス、パリ、2019年）、パリ市立近代美術館（フランス、パリ、2019年）、ハイライン（アメリカ、ニューヨーク州ニューヨーク、2017年）、ヴェルサイユ宮殿（フランス、2017年）、クストハル・シャルロットブルク（デンマーク、コペンハーゲン、2017年）、レ・ザパトワール現代美術館（フランス、トゥールーズ、2017年）、サーベントイン・ギャラリー（イギリス、ロンドン、2014年）、ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館 彫刻ギャラリー（イギリス、ロンドン、2014年）等の、数多くのグループ展で紹介されています。

2023年、ユモーはコロラド州フーパーに、160エーカーの大きさを持つアースワーク《Orisons》を制作し、女性のソロ・アーティストによる史上最大級の作品の一つとなりました。この作品はデンバーに本部を置くブラック・キューブ・ノマディック・アート・ミュージアムがキュレーションを手がけ、実現されたものです。ユモーは、ホワイト・キューブ、およびCLEARING New York/Los Angelesに所属しています。

八木夕菜

1980年生まれ。京都拠点。パーソンズ美術大学建築学部卒業。写真を軸に「見る」という行為の体験を通して多視点観点から意識の変容を促す作品制作を行っている。代表的な個展に、種が持つ生命の営みの儚さや豊かさを紡ぐ「種覚ゆ/The Record of Seeds」(KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭, 2021)、「NOW/HERE」(Pola Museum Annex, 2018)、「視/覚の偏/遍在」(√K Contemporary, 2022)など。主な作品に、写真を立体に立ち上げた《KENCHIKU》(2015)、写真にアルゴリズムを施した《崩れゆく世界》(2016)、日本人の死生観を考察した《祈りの空間》(2017)、「空」の概念を表した《BLANC/BLACK》(2019)、写真における静物画《Superposition》(2024)など。主な受賞に「京都国際写真祭」ポートフォリオレビュー最優秀(2016)、「第35回写真の町東川賞」新人作家賞ノミネート(2019)。金沢21世紀美術館収蔵。



yunayagi2022
©Tomoko Hayashi

ミルディンギンガティ・ジュワンダ・サリー・ガボリ

ミルディンギンガティ・ジュワンダ・サリー・ガボリ(1924年頃-2015年)は、カイアディルトの名高い長老の女性、そして現代アーティストであり、その短いながらも優れたキャリアは、目ざましい文化的レガシーを残しました。

サリー・ガボリは2005年、80歳頃から絵を描き始め、彼女の特徴である表現力豊かな筆致と鮮やかな色使いで、夫の出身地あるディルディビ、父の出身地トウンディ、自身の出身地であるミルディンギン、そしてペンティンク島で最初の移住地であるニンイルキなど、故郷のカーペンタリア湾に浮かぶペンティンク島で、彼女にとって個人的に深い意味を持つ場所を鮮やかに描き出しました。

2015年にガボリが他界した後、ブリスベンのクイーンズランド州立美術館 | 近代美術館と、そしてメルボルンのビクトリア国立美術館で大規模な回顧展が開催され、彼女が残した偉大なレガシーと膨大な作品が称えられました。近年では、2022年にフランス・パリのカルティエ現代美術財団で、2023年にはイタリアのミラノ・トリエンナーレで、国際的な大規模個展と出版が行われました。ガボリは、オーストラリアで最も影響力のある重要な現代アーティストの一人として認知され続けています。

マーク・マンダース

1968年フォルケル(オランダ)生まれ、ロンセ(ベルギー)在住。1992年アーネム市芸術大学(オランダ)デザイン学科卒業。1986年に自ら作り出した「建物としての自画像」というコンセプトに基づき、ドローイング、彫刻、インスタレーションの方式で様々な音、色、リズム、韻、解釈を取り入れた作品を発表してきた。ブロンズ彫刻の伝統に則ったマンダースの彫刻作品は、物理的には堅牢な「モノ」である一方で、故意に作られた亀裂や未完部分が視覚的に脆さや危うさを生み出している。現実と虚構、過去と現在、表現と抽象の境界を曖昧にする、豊かで複雑な視覚言語を創造する。

主な展覧会として、「マーク・マンダースの不在」東京都現代美術館(2021年、東京)、「ミヒヤエル・ボレマンズ マーク・マンダース | ダブル・サイレンス」金沢21世紀美術館(2020年、石川)、「マーク・マンダースの不在」ボンネファンテン美術館(2020年、マーストリヒト、オランダ)、「あいちトリエンナーレ2016 虹のキャラヴァンサライ 創造する人間の旅」愛知県美術館(2016年、愛知)、「不完全な文章のある部屋 第55回ヴェネツィア・ビエンナーレ」オランダ館(2013年、ヴェネツィア、イタリア)、「ドクメンタ11」(2002年、カッセル、ドイツ)、「テリトリ：オランダの現代美術」東京オペラシティアートギャラリー(2000年、東京)、「周辺の自画像 第24回サンパウロ・ビエンナーレ」(1998年、サンパウロ、ブラジル)など。

また、《傾いた頭部》パブリック・アート・ファウンド、ドリス・C・フリードマン・プラザ・ニューヨーク(2019年、ニューヨーク、アメリカ)、「ローキン噴水彫刻」ローキン・スクエア(2017年、アムステルダム、オランダ)で大規模な屋外彫刻を手掛けている。

サム・フォールズ

サム・フォールズ（1984年生まれ）は現在、ロサンゼルスとニューヨークを拠点に活動しています。2007年にリード・カレッジで学士号を得た後、2010年にICPバード芸術研究課程を修了しました。フォールズは、時間、表象、露光といった写真の基本的な概念を密接に扱いながら、さまざまな芸術のメディアム同士のギャップや、アーティストと、オブジェクト、そして鑑賞者の間の隔たりを埋めるような作品を制作します。自然やその元素との共生をはかるフォールズの作品は、制作場所のユニークな環境を指標とした場所の感覚が刻み込まれている一方で、普遍的な死生観も帯びています。フォールズは美術史への畏敬の念を持つのと同時に、モダン・ダンスやミナル絵画からコンセプチュアルな写真やランドアートまで、芸術のジャンルや実践の境界線を共感を取り入れながら曖昧にし、芸術が取り組むべき自然や生命のはかなさの根源的な部分へと集約させます。

主な個展として、ハマー美術館（アメリカ、カリフォルニア州ロサンゼルス、2018年）、トレント・ロヴェレート近現代美術館（イタリア、ロヴェレート、2018年）、ザ・キッチン（アメリカ、ニューヨーク州ニューヨーク、2015年）、ボールルーム・マーファ（アメリカ、テキサス州マーファ、2015年）、ボモナ・カレッジ美術館（アメリカ、カリフォルニア州クレアモント、2014年）、パブリック・アート・ファンド（アメリカ、ニューヨーク州ニューヨーク、2014年）、LAXART（アメリカ、カリフォルニア州ロサンゼルス、2013年）など。グループ展としては、アスペン美術館（アメリカ、コロラド州アスペン、2018年）、ル・コンソーティウム（フランス、ディジョン、2017年）、コロンバス美術館（アメリカ、オハイオ州、2017年）、ウォーリック大学 ウォーリックアーツセンター ミードギャラリー（イギリス、ウォーリック、2016年）、フルーツマーケット・ギャラリー（スコットランド、エジンバラ、2015年）、ハマー美術館（アメリカ、ロサンゼルス、2015年）、メニル・コレクション（アメリカ、テキサス州ヒューストン、2015年）、ドンナレジーナ現代美術館（イタリア、ナポリ、2014年）、インターナショナル・センター・オブ・フォトグラフィー（アメリカ、ニューヨーク州ニューヨーク、2013年）等に展覧しています。

ティファニー・チュン

ティファニー・チュンは、都市から大陸、古代から近現代まで、さまざまな土地の歴史、文化、地形に関する厳密なリサーチと定性分析を通じて培われた領域横断的な実践で世界的に注目されています。彼女の研究成果は、しばしば地図、絵画、写真、彫刻、映像、楽曲の作品として具現化されます。チュンの芸術的実践は、彼女の知的探究心を反映したものであり、景観考古学や歴史生態学に絡む社会政治、経済、環境プロセスの複雑で隠されたもつれの痕跡を発掘します。チュンは空間的な変容、地球の生態系、地質学的記録、気候変動、国際的な貿易ルート、民族の移動などを描き出し、現代における重要な出来事を解きほぐします。地図やアーカイブの権威に挑戦する彼女の作品は、公式記録や歴史的記録の空白を文化的記憶によって復元し、埋めていくのです。チュンの実践は、自然環境と建築環境における私たちの物質文化の足跡を探究し、マクロ・エコシステムとの持続可能な関係を先見的に教えてくれます。



チュンの個展「Rise Into the Atmosphere」は、現在ダラス美術館にて開催されています。2023年には、ナショナル・モール（ワシントンD.C.）で開催された大規模なパブリック・アート展『Beyond Granite: Pulling Together』のプロトタイプ・モニュメントをコミッション作品として制作。『Tiffany Chung: Vietnam, Past Is Prologue』スミソニアン・アメリカ美術館（アメリカ、ワシントンD.C.）、ヨハン・ヤコブ美術館（スイス、チューリッヒ）、Center for Arts on Migration Politics and Staten Museum for Kunst（デンマーク、コペンハーゲン）など、世界各地の美術館で個展を開催。彼女の作品は、第56回ヴェネツィア・ビエンナーレ、シドニー・ビエンナーレ、光州ビエンナーレ、クエンカ・ビエンナーレ（エクアドル）、ニューヨーク近代美術館、大英博物館（イギリス、ロンドン）、シルクンストハレ（ドイツ、フランクフルト）、ノーベル平和センター（ノルウェー、オスロ）、ルイジアナ美術館（フムレベック）、M+（香港）などの国際展やビエンナーレで紹介されています。チュンはイェール大学RITMでメロン・フェロー（2021）のほか、ニュースクール大学ヴェラ・リスト芸術・政治学センターで芸術と社会正義に関するジェーン・ロンバード・フェロー（2018–2020年）を務めました。またこれまでに、アジア・アーツ・ゲーム・チェンジャー賞（2020年）、アジア・カルチュラル・カウンスル・グラント（2015年）、シャルジャ・ビエンナーレ・アーティスト賞（2013年）を受賞しています。2025年8月まで個展「Rise Into the Atmosphere」（ダラス美術館、米国）開催中。

オクサナ・パサイコ

オクサナ・パサイコは、意図的な匿名性に包まれた作家です。2004年にサン・セバスチャンで開催された『マニフェスタ5』に参加した際、彼女は展覧会カタログの略歴に「アーティストの希望により、彼女の人生についての詳細は公開されません」と記載するよう求めました。しかし同時にこの展覧会のウェブサイトには、パサイコが1982年にルテニア、つまり正式な国家ではなくポーランド、スロバキア、ハンガリー、ルーマニア、ウクライナに挟まれた東ヨーロッパの歴史的地域に生まれた、と記されています。よってパサイコというアーティストは、国籍よりも民族的な出自を重視していると言えるでしょう。2006年にルーマニアの若手アーティスト向けのビエンナーレへ参加した際には、彼女はオスロ、アムステルダム、そしてベルギーのロンセを「拠点にしている」と記されました。またその極端に寡黙な経歴と同様、彼女は滅多に作品の展示を行わず、それは、自身を守る彼女の決意の現れでもあります。パサイコは『マニフェスタ5』のために、オランダ人アーティスト、パス・ヤン・アーデルによる《Please don't leave me》(1969年)という文字をキリル語で書き直しました。またこの展覧会に合わせ、ローマ・パブリケーションズがパサイコによる30枚の足の写真を収めた小冊子『30 Feet』を出版しています。ローマ・パブリケーションズは、1998年にグラフィックデザイナーのロジャー・ウィレムス、およびアーティストのマーク・マンダースとマルク・ナグザームによって設立されたアムステルダムの美術系出版社で、パサイコの作品の大多数と関連を持ってきました。



2005年、ローマ・パブリケーションズはパサイコによる『Short Sad Text (based on the borders of 14 countries)』と題されたエディションを発行しました。これは、7本の黒い人毛が埋め込まれた2つの石鹸から成り、7つの人工的な領土の境界線の模様をなぞるものです。パサイコはオスロにある公衆トイレにその1つ目のエディションを、アントワープ現代美術館（ベルギー、アントワープ）に2つ目のエディションを寄贈しています。加えて同出版社は、「この作品は持ち帰り可能なカードとしても存在する」と発表しました。この石鹸とポストカードはこれまでに、芸術の非永続性やはかなさをテーマとする複数のグループ展へ出展されてきました。さらにパサイコの作品には、既存の作品の土産品ともいえるポストカードも存在します。それは自身の作品のポストカードに限らず、ピート・モンドリアンやジョルジョ・デ・キリコなど、他のアーティストの作品をウィットに富んだかたちで見せるカードにも見られます。また2011年にベルリンなどで開催されたグループ展『The Joy of Pleasure』(2011-2012年)では、色を塗られたカーテンのような作品《The Folds》(2011年)を展示しました。《Short Sad Text》の初出から20年あまりが経った2024年、パサイコは詩集の形式で構想された10点の作品から成る出版物と共に、この作品に立ち返ります。再びローマ・パブリケーションズにより出版される本書は、Keijibanと共にデザインを行なった日本特別バージョンをフィーチャーしたものとなりました。

ユージニア・ラスコプロス

ラスコプロスの作品におけるコンセプトの幅は、フェミニズムとパフォーマンスを重要な文脈として、アイデンティティ・ポリティクス、身体、ジェンダー、セクシュアリティと差異、言語、翻訳といった関心を含みます。これらのつながりは作品の内外に織り込まれ、彼女にとって政治を用いることと詩学を用いることは等しく重要であると言えます。ラスコプロスは自身が移民かつバイリンガルとして育った経験から、翻訳に焦点を当て、言語が崩壊する地点に関心を寄せます。彼女にとって政治的であることは、世界について知り、その中で社会的な活動を行うことを意味します。アーティストとしての彼女の旅路は「他者」の問題を探求し続けるものであり、最終的な結論を求めるものではありません。そうした作品は、写真とビデオの境界を探求し、パフォーマンス、転写、ネオン、インスタレーションを総合した領域横断的と言えるでしょう。



photo: Zan Wimberley

主な展覧会歴に、「(SC)OOT(ER)ING around, Su san Cohn and Eugenia Raskopoulos」タラワラ美術館（オーストラリア、ヴィクトリア州、2024年）、モノグラフ『Eugenia Raskopoulos: Vestiges of the Tongue』(Power Publications and Formist, 2019年)、「Know My Name」オーストラリア国立美術館（オーストラリア、キャンベラ、2021年）、「Shadow Catchers」ニュー・サウス・ウェールズ州立美術館（オーストラリア、シドニー、2020年）、「The National」Carriageworks（オーストラリア、シドニー、2019年）、「Endless Circulation」タラワラ・ビエンナーレ、タラワラ美術館（2016年）、「Footnotes」ニュー・サウス・ウェールズ州立美術館（2012年）、「Image Anxiety」フォト・エスパーニャ（マドリッド、2012年）。

ガブリエラ・マンガーノ&シルヴァーナ・マンガーノ

ガブリエラ・マンガーノとシルヴァーナ・マンガーノによる協働的な実践は、パフォーマンス、ビデオ、彫刻、インスタレーションを取り入れた多面的な探求です。日常生活からインスピレーションを受け、しばしば日用品を使ったパフォーマンスを行う彼らの作品は、対人関係における複雑さ、時間の認識、記憶の本質、人と人との繋がり複雑さを追求します。その革新的な制作へのアプローチは、ジェスチャーや振り付け、繰り返しを通じた言葉にならないコミュニケーション方法に重点を置き、現実と虚構の境界を曖昧にするものです。ビデオ作品では、オーディエンスを想像と現実が魅惑的に絡み合う領域へと誘うことで、私たちを取り巻く世界をめぐる理解や、人と人とのつながりの複雑さを再考するよう促します。ガブリエラ・マンガーノとシルヴァーナ・マンガーノは、オーストラリア ヴィクトリア州を拠点に活動しています。

主な(グループ) 展覧会歴に、「Single Channel」オーストラリア国立美術館 (オーストラリア、キャンベラ、2024年)、「The Double: Identity and Difference in Art Since 1900」ナショナル・ギャラリー・オブ・アート (アメリカ、ワシントンD.C.、2022年)、「未完の庭、満ちる動き」国際芸術センター青森 (日本、青森、2018年)、「第9回恵比寿映像祭 マルチプルな未来」東京都写真美術館 (日本、東京、2017年)「Reenacting History」国立現代美術館 (大韓民国、ソウル、2017年)、「第8回アジア・パシフィック・トリエンナーレ (APT8)」クイーンズランド州立美術館 | 近代美術館 (オーストラリア、ブリスベン、2015-2016年)

SUPERFLEX

SUPERFLEXは、1993年にヤコブ・フィンガー、ビヨンスティヤン・クリスチャンセン、ラスムス・ニールセンによって設立されました。拡張的なコレクティブとして構想されたSUPERFLEXは、庭師からエンジニア、オーディエンスに至るまで、一貫してさまざまな協力者と活動してきました。社会的・経済的組織の創造におけるオルタナティブ・モデルに取り組み、これまでの作品は、エネルギー・システム、飲料、彫刻、コピー、絵画、植物種苗場、契約、公共スペースなどのかたちを取ってきました。展示空間という物理的な場所の内外で活動するSUPERFLEXは、受賞歴もある《Superkilen》が 2011年にオープンして以来、大規模な公共スペースのプロジェクトに携わってきました。



photo: Daniel Stjerne

これらのプロジェクトは、地域コミュニティや専門家、子どもたちの意見を取り入れた参加型のものが多いです。またコラボレーションという考えを更に拡張し、近年の作品では他の生物種の参加を募っています。SUPERFLEXは動物の視点を取り入れた新しい都市論を展開し、社会における異種間の共生を目指します。

サラ・ジー

1969年ボストン (米国) 生まれ、ニューヨーク在住。1997年にスクール・オブ・ヴィジュアル・アーツを卒業以降、作品が置かれる空間を強く意識した制作を行っている。綿棒、爪楊枝、ティッシュ、糸、プラスチック容器、メジャー、クリップや梯子等、大量生産された没個性的で安価なモノを用いて集積、配列したインスタレーションは、整然としながら混沌とし、絶妙なバランスと緊張感ある世界を生む。加えて、作品に組み込まれた扇風機の動力で起こる風や電気スタンドのランプが灯す光の様相は、あたかも作品がエネルギーを持ち、空間に侵略し、自発的に増幅する生命体のようなものである。サラ・ジーはありふれた日用品に息を吹き込み、新たな物語を見出そうとしている。

主な展覧会として、「サラ・ジー」ソロモン・R・グッゲンハイム美術館 (2023年、ニューヨーク、アメリカ)、「ナイト・イントゥ・デイ」カルティエ現代美術財団 (2020年、パリ、フランス)、「サラ・ジー：トリプル・ポイント 第55回ヴェネツィア・ビエンナーレ」アメリカ館 (2013年、ヴェネツィア、イタリア)、「東京アートミーティング トランスフォーメーション」東京都現代美術館 (2010年、東京)、「サラ・ジー」銀座メゾンエルメス フォーラム (2008年、東京)、「サラ・ジー」シカゴ現代美術館 (1999年、アメリカ)、「ベルリン/ベルリン ベルリン・ビエンナーレ」芸術アカデミー (1998年、ドイツ) など。

彼女の作品は、テート美術館 (イギリス)、M+ミュージアム (香港)、MUDAM (ルクセンブルク)、ニューヨーク近代美術館、シカゴ現代美術館、グッゲンハイム美術館 (ニューヨーク)、ホイットニー美術館 (ニューヨーク)、ロサンゼルス現代美術館、金沢21世紀美術館など、著名な施設のパーマネント・コレクションに収蔵されている。

エンリケ・オリヴェイラ

エンリケ・オリヴェイラは1973年、ブラジル オウリーニョ生まれ。1990年にサンパウロへ移り住み、サンパウロ大学 (USP) で視覚芸術の修士号を取得。

オリベイラの没入型の環境やハイブリッドな空間は、彫刻、絵画、建築といった領域を行き来しながら素材本来の性質を呼び戻し、その常識的な使い方を再定義します。またそうした作品には、様々な引用が見てとれます。SFや医学書から美術史や精神分析にまでわたる主題は、生有機的なイメージと都市の物質性を融合させた独自の視覚言語へと向かいます。彼の作品はしばしば空間、表面、一貫性といったものの認知を不安定にさせ、日常生活を理解するための確実な手段とされてきたカテゴリーを弱体化させます。特に建築に組み込まれた構造体では、不快とも言える状況へ大衆を惹きつける一方で、彫刻的な介入によりセンシビリティと下劣さの境界を曖昧化しています。死と腐敗という概念に潜む実存的・政治的な問題を提起するこれらの作品は、しばしば現代の鏡の役割を果たし、世界における人類の立ち位置や、自然や環境との関係を映し出します。

主な展覧会歴に、「Baitogogo」パレ・ド・トーキョー (フランス、パリ、2013年)、「Transarquitetonica」サンパウロ大学現代美術館 (ブラジル、サンパウロ、2014年) などが挙げられます。グループ展では、「Bruges Triennale」(ベルギー、2021年)、「Brasilia - Installation from 1960 to the present」シルンクンストハレ (ドイツ、フランクフルト、2013年)、「Object in Flux」ボストン美術館 (アメリカ、2015年)、第29回サンパウロ・ビエンナーレ (ブラジル、サンパウロ、2010年)。また、そうした展示活動のかたわら日本、フランス、ブラジル等で受賞歴を重ねています。彼の作品は、ヴァージニア美術館 (アメリカ)、クイーンズランド州立美術館 | 近代美術館 (オーストラリア、ブリスベン)、ボンピドゥー・センター (フランス、パリ) などに収蔵されています。Les Jardins Suspendus (フランス、ル・アーヴル) やショーモン・シュル・ロワール城 (フランス、ロワール)、Arte Sella (イタリア) 等におけるインスタレーション作品の常設展示も行っています。



photo: Julian Marshall